

2006年8月17日(木) 準々決勝 時間2時間27分(13時48分～16時15分) 観衆2万8千人 審判長谷川/若林/藤野/三宅

1	2	3	4	5	6	7	8	9	計	安打	盗塁	失策	
帝京 (東東京)	0	0	0	2	0	0	0	2	8	12	16	1	0
智弁和歌山 (和歌山)	0	3	0	3	0	0	2	0	5	13	13	0	0

1	2	3	4	5	6	7	8	9
帝京	中安	三振	二ゴ	投ゴ	中飛	中飛	四球	四球
智弁和歌山	中安	三振	二ゴ	投ゴ	中飛	中飛	四球	四球

投手	投球回	自責点
高垣ケ	1%	3
大勝	4%	5
大勝	2	0
大勝	0	4
大勝	0	1
大勝	0	0

大会記録 (1試合) 両チーム最多本塁打 7 (智弁和歌山5、帝京2) チーム最多本塁打 5 (智弁和歌山)

投手	投球回	自責点
広井	3	1
竹中	5%	11
松本	1/2	0

選手権大会 2回 優勝回数 2回 27勝11敗 勝敗 24勝6敗 選抜大会 1回 優勝回数 1回 16勝6敗 勝敗 16勝11敗 春夏通算 43勝17敗 勝敗 40勝17敗 7割1分7厘 勝率 7割2厘 甲子園での直接対決 1勝 勝敗 1敗

九回裏に3点本塁打を放ち雄たけびをあげ二塁へ向かう智弁和歌山の橋本

九回表、3点本塁打を放つ帝京の沼田

このシリーズは荒川公治が担当します。敬称は原則略します。

あの夏 2006年 智弁和歌山 × 帝京 1

想像を超えた2度の大逆転



「お互い、すごい試合をしましたね」。試合後、球場内を歩いた智弁和歌山の監督と帝京の前田監督が握手を交わした。

2006年の第88回全国選手権。この年は、マウンドで汗をぬぐう姿が絵になった。「ハンカチ王子」こと早稲田実(西東京)のエース斎藤佑樹を抜きにしては語れない。田中将大を擁して3連覇を狙った駒大苫小牧(南北海道)を、決勝では史上2度目となる引き分け再試合の末に破って初優勝を飾った。だが、球史に残る決勝の前半には、智弁和歌山と帝京の準々決勝、智弁和歌山と帝京の強豪同士の戦い。

ともに夏の全国制覇2度、春の選抜大会で1度の優勝を誇る。智弁和歌山は高嶋監督、帝京は前田監督が就任してから甲子園に出場するようになった。両チームの勝率は、大舞台で7割を超える。そんな名将の予測や思惑を超えた

展開は、高校野球の妙味が凝縮された試合でもあった。午後1時48分に始まった試合は、智弁和歌山の本塁打攻撃で、8-4と智弁和歌山がリードして八回を終えた。勢いは見えたようだったが、観衆も空席が広がっていた。九回に帝京が8点を奪って一気の逆転、そしてその裏、智弁和歌山が5点を挙げ再逆転でサヨナラ勝ち。選手らは天国と地獄を味わった。

九回表、帝京が球場を異様な雰囲気に変えていく。2死一、二塁から5連打で逆転。なおも一、二塁、打席に沼田が入る。この回の先頭に代打で登場し、凡退していた。「1点勝っていた。気持ちいい。沼田の前の我妻、杉谷は変化球をこらえて安打にしていた。「バツリッーはアレっ、と思うところ。狙いはまっすっ、」

2球目。内角に構えた智弁和歌山の橋本のミットが真ん中へ。甘い直球を沼田は強振した。高校時代に20本ほど本塁打を打ったが、「あの打球だけは感触がなかった」と言う。それほど真芯でとらえた打球は、台風の余波で左翼から右翼へ流れる風を突き、左翼席へ飛び込んだ。打球の軌道と、沸き立つスタンドに確信した。「塁へ4、5歩進んだところで、人さし指を立てた瞬間、マウンドにいた智弁和歌山の竹中は思った。「あかん。終わった」。大飛球を見上げた左翼手の馬場も「無理だ」。

「優勝した時にもない、何と言えはいいの、甲子園がうなっていた。背中を電気が走った。前田監督は振り返る。試合が動いた九回の表と裏、両チームに何があり、選手は何を考えたのか。八回が終わった場面を振り返ってみる。

「あの仁王立ちの高嶋さんの姿勢が崩れた。いけると思った」。3ランの後、ベンチ奥に引込んだ高嶋監督は汗をぬぐっていた。2年生スコアラーの大福和平は、そんな監督を見た記憶がない。

「優勝した時にもない、何と言えはいいの、甲子園がうなっていた。背中を電気が走った。前田監督は振り返る。試合が動いた九回の表と裏、両チームに何があり、選手は何を考えたのか。八回が終わった場面を振り返ってみる。

終わったな。橋本は「好事魔多し」といっへきですかね。三塁側の帝京ベンチでは、4番の中村や先発した高島らが目に涙を浮かべていた。「こんなすごいチームで投げさせてもらった。高嶋は感極まっていた。本塁打で圧倒する智弁和歌山に対し、目指す「つなぎの野球」を最後に發揮し、一発でこめを刺した。そう見えた。

帝京の前田監督は怒濤の攻撃中、象徴的なシーンを覚えている。相手の一塁側ベンチ前、そこまで不動で立っていた高嶋監督の体が動いた。試合中、ベンチ前で立ち続ける姿が有名な監督が。

「あの仁王立ちの高嶋さんの姿勢が崩れた。いけると思った」。3ランの後、ベンチ奥に引込んだ高嶋監督は汗をぬぐっていた。2年生スコアラーの大福和平は、そんな監督を見た記憶がない。

「優勝した時にもない、何と言えはいいの、甲子園がうなっていた。背中を電気が走った。前田監督は振り返る。試合が動いた九回の表と裏、両チームに何があり、選手は何を考えたのか。八回が終わった場面を振り返ってみる。

このシリーズは荒川公治が担当します。敬称は原則略します。

全国高校野球選手権大会の名場面を振り返る「あの夏」の第11シリーズ、2006年の第88回大会準々決勝「智弁和歌山-帝京」は、26日まで計20回(原則火曜～土曜日に掲載)を予定しています。